

「梅花歌」序の成立と作者

——吉田宜の書簡を中心に——

前田 淑

周知のように、万葉集巻五「梅花歌」は、大宰府の官人および管内の諸国司ら三十二人によつて詠まれたものであるが、その序の成立や作者については、まだ決定的な論証がないように思われる。そこでこの小稿においては、先学の研究のあとをたどりながら、その再検討をこころみることにしたい。

はやく『代匠記』において指摘されているように、この序が、王義之の『蘭亭集序』に倣つて出来たものであらうということは、ほぼ明らかであるが、近年、比較文学の立場から、その語句や構成について新しい研究がなされ、これによつて、「梅花歌」の序が、筑紫歌壇における、漢文学に造詣の深い人の手に成つたものであらうということが推測され、旅人と憶良とがその筆者に擬せられるのは至極当然である。『代匠記』初稿本、『略解』、『古義』、『新考』、佐々木博士⁽¹⁾、『私注』などは憶良説であり、『童蒙抄』、芳賀博士⁽²⁾、沢瀉博士⁽³⁾、『全註釈』、『総釈』、『全釈』などは旅人説である。(ただし契沖は、『代匠記』精撰本においては、「此序未詳三誰之作」と初稿本の説を改めて疑問をのこし、『総釈』の森本博士も、『万葉集の芸術性』の中では、家持の筆になるものであらうと、異説をたてられている。)

憶良説と旅人説とを比較すると、その相違は主として「梅花歌」

序の文体や語句、および吉田宜の書簡についての見解の相違によるものであることがわかる。いうまでもなく、旅人は『懷風藻』にもその名を知らね、このような序の作者としては第一に擬せられるのであるが、憶良もまた、中国へ渡つた人であり、巻八・一五一九の左註にみえるように、『懷風藻』の主要な作者、長屋王の邸に出入したらしく、万葉集の中で、その漢文学への造詣の深さを示している。しかしながら、「梅花歌」の序にみられる華麗な文体は、はたして憶良のものであらうか。憶良説の土屋氏は、「日本挽歌の序の如きは相通ずるところが最も多い⁽⁴⁾」と述べられているが、旅人説の武田博士は、「憶良の文章は理窟つぽく、かやうな華美な体がなく、全然相違してゐる⁽⁵⁾」と見解を異にしておられる。また、憶良説がその根拠の一つとするのは、序にみえる「師老」が尊称・他称であるとする点にある。井上博士は、「自称ならば、歌の下にも主人でなく師老と書くはず⁽⁶⁾」といわれ、これに対し鴻巣氏は、「師老」は旅人が自らをさした語であり、次の松浦河に遊んだ時の歌の後人追和之詩三首の下にも書いてあるので、自称である⁽⁷⁾と述べておられる。しかし、「師老」が必ずしも尊称・他称あるいは卑称・自称と限つたものでないことは、近年、古沢未知男氏によつて明らかにされ⁽⁸⁾、「師老」が、序の作者を決める手がかりにはならないことが明らかにされた。また、旅人説では、「梅花歌」の順序が、大体官位の順になつていながらもかわらず、旅人だけは主人として、重だつた客とみられる七人の次にある点や、この巻の特に名を記さないものは、すべて旅人の作とみるのが合理的であるという見地から、序は旅人の作であるとのべているが、この点に関しては憶

良説は、はつきりした反証をあげてはいないのである。しかし、以上のような点からだけでは、「梅花歌」の序の作者を誰と決定することは困難である。思うに、その手がかりは、次にのべる吉田宜の書簡にあるのではあるまいか。

宜の書簡は、八六四―六七の四首の歌をとまなう漢文体のものである。冒頭に、「宜啓。伏奉三四月六日賜書。」とあり、ある手紙の返書であるが、その中に、「梅花芳席。群英摘藻。松浦玉潭。仙媛贈答。」という句があり、「奉和諸人梅花歌二首」「和松浦仙媛歌二首」「思君未盡重題二首」がその後にあるので、この書簡を受取つた人が、天平二年四月六日附で、「梅花歌」と「松浦仙媛歌」とを書簡に附して、宜の許に送つたことは明らかであろう。この人物が、憶良であつて、旅人ではないというのは、「梅花歌」の序で憶良説を主張する土屋氏であるが、⁽⁹⁾ 卷五には、「憶良聞。方岳諸侯。都督刺史。並依典法。巡行部下。察其風俗。意内多端。国外難出。謹以三首之鄙歌。欲写五藏之鬱結。其歌曰。」として、

松浦県佐用比売の子が領巾振りし山の名のみや聞きつつ居らむ

(八六八)

足比売神の命の魚釣らすと御立たしせりし石を誰見き(八六九)

百日しも行かぬ松浦路今日行きて明日は来なむを何か障れる(八七〇)

と、「天平二年七月十一日筑前国山上憶良謹上」の三首があり、これによれば、憶良が松浦河に行かなかつたことは明らかであり、したがつて、憶良が「松浦仙媛歌」を作つたとは思われないのであ

る。このように見て来ると「梅花歌」は、旅人の手によつて宜の許におくられたもののように思われる。宜の書簡の中には、「宜悉主之誠。誠逾三犬馬。仰徳之心。心同三葵霍。」と、鄭重な対句があり、当時、憶良より上位の官であつた宜が、憶良に宛てた書簡の文体としては、いささか丁寧すぎるくらいがある。もつとも、この鄭重さは、あるいは年長者への儀礼と考えられないこともないが、次に挙げる句は、相手が旅人と考えて、はじめてうなづけるのであるまいか。すなわち、「類三杏壇各言之作。疑三衡阜税駕之篇。」がそれである。「杏壇」は『莊子』漁夫篇の「孔子遊三緇帷之林。休三坐乎杏壇之上。弟子説書。孔子絃歌鼓琴奏曲。」に典故を仰ぎ、「各言」は『論語』の顔淵季路侍。子曰。盍各言爾志。を典拠としたものであろう。孔子が杏壇にあつて、弟子たちがそれぞれ志をのべたような作であるとして、「梅花歌」を賞讃しているのであるが、孔子とその弟子という比喻は、政治的統率者であり、筑紫歌壇の主導者であつた大宰帥大伴旅人と、大宰府の官人および管下の各国司といふ関係において、はじめてうなづけることであり、賞讃の辞も生きてくるのであつて、一国司にすぎない筑前守山上憶良への書簡とはどうしても受取りがたいのである。憶良は大式紀郷以下とともに、いわば弟子の位置にあつたことを思うがよい。また、「衡阜税駕」についても同様である。この句は、『文選』洛神賦に、「税三駕平衡阜」とあるところに拠つたものであり、洛川の神女に松浦河の仙女を比して、「遊三松浦河二序」を賞めているのであるが、前に述べたように、憶良は松浦河に遊んではいないのであるから、宜の書簡は、旅人に宛てたものであつたと

考えざるを得ないのである。

さらに、これを裏づけるものとして、「思_レ君未_レ尽重題二首」をとりあげたい。その第二首は、

君が行きけなぐなりぬ奈良路なる山_〇。齋_〇の木立も神さびにけり
(八六七)

というのであるが、この歌は、旅人の、

吾が行きは久にはあらじ夢の回淵瀬にはならずて淵にしあらも
(三三五)

に対応するものであろうし、歌中の「山齋の木立」も、旅人帰京後の歌、

妹として二人作りし吾が山_〇。齋_〇は木高く繁くなりけるかも(四
五二)

で知られるように、かつて彼が筑紫へ赴任する前に、妻と二人で作った「山齋」の木立を指しているのである。また、旅人帰京直後の歌、

ここに在りて筑_〇。紫_〇やいづく白_〇。雲_〇のたなびく山_〇。のかたにしあるら
し(五七四)

も、直接には、筑紫に残った沙彌満誓からおくられた歌に和したものであるが、内容としては、満誓の歌をうけたものではなく、むしろ「重題二首」の第一首、

はろばろに思はゆるかも白_〇。雲_〇の千重にへだてる筑_〇。紫_〇の国は(八
六六)

に負うものと見られるのである。このように見て来ると、旅人が宜に宛てて、「梅花歌」と「松浦仙媛歌」をおくり、宜がこれに和す

る歌を返書に附しておくたということは、うなづけるのではあるまいか。

倉野憲司博士は、「梅花歌」三十二首の末席に名をつらねている筑前掾門氏石足と小野淡理とを、「梅花歌」の筆録者であろうと推定されているが、宜への書簡とともにおくられた「梅花歌」は、さらに旅人の手によつて整備されたとみななければならない。したがつて、序の作者もまた旅人ではないかという推定が可能になつて来る。もちろん、宜の書簡は、直接には序にふれていないが、「梅花芳席」の一句は、その存在を予測させるのである。小島憲之氏は、天平歌壇における「歌序十歌群(十追和歌)」という型を考え、これが、六朝初唐詩の詩序と詩との関係から暗示を受けたものであると見ておられるが⁽¹⁾、この型は、前期万葉には見られなかつた新しい形態であり、ひとり「梅花歌」のみでなく、「松浦仙媛歌」をはじめ、巻五における大部分のものについても云えることである。したがつて、吉田宜へおくられた「梅花歌」も「松浦仙媛歌」も、序をともなつた上述のような形態として、一応完成したものであつたと見ることが出来るのである。

以上のように考えれば、「梅花歌」の序の作者を、憶良や家持に擬する説は、再考の余地があるようである。云い換えると、「梅花歌」の序は、旅人の手によつて、天平二年四月六日以前に、すくなくとも、現在の形に近いものとして成立していた、と見るのが妥当ではあるまいか。

註

(1) 佐佐木信綱博士「和歌史の研究」

(2) 芳賀矢一博士「万葉集巻五について」

(3) 沢瀉久孝博士「万葉集研究」

(4) 「万葉集私注 第五巻」参照

(5) 「万葉集全註釈 第五巻」参照

(6) 「万葉集新考 第二巻」参照

(7) 「万葉集全釈 第二冊」参照

(8) 「梅花歌序考」(「国語と国文学」昭和卅年八月号所収) 参照

(9) 前掲

(10) 「天平歌壇の流れ」(「国語国文」第廿一卷第一号所収) 参照

※ この稿を草するにあたり、倉野先生から、懇切な御教示をたまわつたことを、心から御礼申し上げます。

— 本学助手 —